奈文研ニュース

No.62 Sep.2016

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市佐紀町247番1
https://www.nabunken.go.jp

キトラ古墳壁画体験館四神の館（キトラ古墳壁画保存管理施設）の開館

四神像や天文図の壁画で有名な特別史跡キトラ古墳では、壁画の保存のための取組が進められています。現在は取り外した壁画の修復がほぼ終了し、今後は当分の間、保存施設で保管していきます。

2016年９月24日に、国営飛鳥歴史公園のキトラ古墳周辺地区が開園しました。キトラ古墳壁画体験館四神の館（以下、四神の館と言う。）はその中の南東部、キトラ古墳の脇にあります。開園に先立つ８月下旬、この施設にキトラ古墳の壁画を搬入しました。壁画はここで厳重な体制のもとに、将来にわたって保管されます。

四神の館の概要は、前号（No.61）の奈文研ニュースでお知らせしたとおりです。１階のキトラ古墳壁画保存管理施設が文化庁のエリアで、そこには保存科学を主とした研究員１名、アソシエイトフェロー２名、事務補佐員１名を中心に常駐して、壁画の保存等の業務にあたっています。

９月24日は午前中の開園式典に続き、午後からは四神の館が一般の人々に開放され、壁画の公開が始まりました。今回の公開は、混雑による室温の上昇等を懸念したことから、事前の申し込み制をとりました。多数の応募があり、壁画に対する関心が依然として高いことがわかります。

壁画の公開は入れ替え制で、一回10分の見学時間です。一度に入るのは最大30名程度としました。貴重な壁画に負担を与えないよう、万全の体制のもとに保存と活用の調和を図っています。今回の公開は、10月23日までで、壁画は以後も期間を限って公開していきます。

今回公開した壁画は、初公開となる天井天文図をはじめ、朱雀像のある南壁、白虎像などを描いた西壁の３面です。各壁の壁画は石室壁面から小片に分けて取り外し、それを再構成したものです。

壁画はこれまでも飛鳥資料館等で公開してきましたが、それは図像のある部分だけに限られていました。壁画は図像がもちろん重要ですが、絵画としてみた場合、それだけでは十分ではありません。数々の名画を思い起こしてみてください。図像だけではなく、余白をも含めた構図として完成されていることが理解できるでしょう。キトラ古墳の壁画も、まさにそれと同じです。今回、修復の済んだ壁画をご覧いただければ、これまでの公開とはまた違った、絵画作品としての壁画をより身近に感じていただけることと思います。

新しい施設が開館し、キトラ古墳壁画の保存は新しい段階を迎えました。今後とも、奈良文化財研究所は関係する機関と協力しながら、壁画を保存し、後世に確実に伝えていくことに取り組んでいきます。

（都城発掘調査部長　玉田 芳英）

修復された西壁壁画

修復された天井天文図

発掘調査の概要

藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡の調査

（飛鳥藤原第187次）

2015年11月に始まった飛鳥藤原第187次調査は、2016年度になってから佳境を迎えました。前号の奈文研ニュースNo.61では、藤原京期の大型掘立柱建物の確認と、弥生時代の円形周溝墓の発見を報じていました。4月以降は、藤原京右京九条三坊東北坪（調査区西半）でみつかった大型掘立柱建物や、西二坊大路に沿う南北塀などの完掘、それに斜行溝（古墳時代）や土坑（弥生時代）、井戸（平安時代）の調査を進めてきました。

しかし最も注目を集め、調査にも時間を要したのが、弥生時代の円形周溝墓でした。瀬田遺跡における円形周溝墓の発見は、各紙によって予想以上に大きく報道され、現地見学会への参加者もおよそ1,750名と盛況でした。この記事を書いている7月上旬の時点で、周溝墓の調査は一部を除き完了していますが、周溝内から保存状態のよい土器群が出土し、記録の作成に時間をかけた時期もありました。

今回みつかった円形周溝墓は、直径約19mの円形で、幅約6mの周溝をめぐらせたものです。陸橋部を合わせた周溝墓の全長はおよそ25mで、主軸は北でやや東へと振れています。墳丘はすでに削り取られているため、その周溝を丁寧に掘り下げることを心がけました。

現場班では、①現代のかく乱坑によってひどく破壊された陸橋部の確定と、②周溝の埋没過程の解明とを重要課題とみなしており、調査の成否はまさにこの2点にあると考えていました。陸橋部の西縁はかなり明瞭でしたが、そのいっぽうで東縁は保存状態が悪く難渋しました。それでも、基盤層（シルト層）に特有の流文構造を手がかりに、陸橋の東縁を識別することができました。

周溝埋土の堆積順序を検討した結果、埋没過程は次のとおりでした。まず、周溝の底にはシルト質のブロックを多く含む土層（加工時堆積層）が一様に堆積します。次いで、その上には土器や有機物を多く含む黒色土が溜まり、周溝の肩付近には黒褐色土が堆積します。最後に、黒色土を厚くおおう土層が堆積し、周溝は埋まってしまいますが、墳丘の東側は砂・シルトの互層によって埋没していることがわかりました。弥生土器が多く出土したのは黒色土や黒褐色土で、ことに周溝の東北部に集中する傾向がありました。これらの土器は庄内0式期前後（2世紀後半）のもので、周溝墓の築造時期を示すとともに、良好な一括資料としても今後注目されるでしょう。

4月から調査を引き継いだわが現場班には、弥生時代や古墳時代の専門家がいません。円形周溝墓を掘るのも、むろん初めての経験です。しかし、内外から様々なご教示やご支援を得て、必要にして十分な調査ができたものと一同自負しております。今回の調査成果や出土資料が、弥生時代の研究に活かされることを願ってやみません。

調査はまだしばらく続きます。実は完掘した周溝の底やかく乱坑の底部等から、縄文土器や石器が出土しています。瀬田遺跡は縄文時代から弥生時代・古墳時代を経て、平安時代にいたる複合遺跡なのです。　（都城発掘調査部　森川 実）

周溝墓の全景（南から）

周溝東北部の土器出土状況（北西から）

朱雀大路・二条大路（平城京右京三条一坊一坪・八坪）の調査　（平城第566次）

奈良文化財研究所では、国土交通省が進めている史跡朱雀大路等の整備にともなう発掘調査を2015年から実施しています。今回の調査は、朱雀門前における朱雀大路西側溝と二条大路南側溝、ならびに西一坊坊間東小路の位置と規模を解明することを目的として、東西２ヵ所の調査区を設定しました。調査面積は東区が360㎡、西区が324㎡で合計684㎡、調査期間は2016年４月５日～７月27日です。

東区では、朱雀大路西側溝と二条大路南側溝との合流点を検出し、西側溝は二条大路を横断することを確認しました。西側溝の幅は3.7～5.0mと場所により差が大きいですが、東岸に護岸の杭列が検出されており、当初は約3.7m幅で直線状に掘削されたものと考えられます。二条大路南側溝から流れ込む水量の多さから合流部分では東側に大きくあふれていたようです。また、合流点より北側の西側溝は新旧２時期にわけられ、新しい溝は幅をやや狭くして掘りなおしていることもわかりました。東岸で検出されたしがらみ護岸は二条大路南側溝との合流点より北側で特に残りが良く、0.4m間隔で杭を斜めに打ちこみ、その間に５本以上の細い枝をわたして籠状に編んだ構造が判明しました。

西区全景（右奥が東区、南西から）

西区では、二条大路南側溝と西一坊坊間東小路との交点のほか、二条大路を横断する南北溝を検出しました。南側溝はこの南北溝との合流点より東側で幅が広く、深さも深くなり、溝底からは堰かしがらみとみられる杭も検出されました。

南北溝はこれまで知られていない溝で、朱雀門から約90m西側の位置にあたります。最大幅3.8m、深さ0.8mと二条大路南側溝と比べても遜色のない規模のものです。二条大路南側溝と一体で機能し、同時に埋め立てられました。合流点では溝壁が大きくえぐられており、かなりの水量があったとみられます。南面大垣周辺または宮内の排水を二条大路南側溝へ流していたものと考えられます。

西一坊坊間東小路では、西側溝は検出されましたが東側溝は検出されませんでした。西側溝は幅1.6m、深さ0.5mとやや小規模で、二条大路南側溝との合流点にかけて埋土に多量の瓦が含まれていました。三条一坊八坪には築地塀の存在が推測されます。

今回の調査で検出した条坊道路・側溝の規模・位置は、これまで奈文研や奈良市がおこなってきた発掘調査の成果と整合し、朱雀門前の条坊道路や側溝の配置は朱雀大路を中心に東西対称に計画されていたことを具体的に確認できました。さらに、朱雀門西南側の排水計画もあきらかになってきました。溝の埋土に含まれる土器から、これらの溝は平城京廃絶後もある程度存続していたと考えられます。

いっぽう、二条大路を横断する溝にかかる橋等の存在や、南北溝と二条大路北側溝や南面大垣との関係は解明されませんでした。周辺調査の進展が期待されます。　（都城発掘調査部　番 光）

朱雀大路西側溝東岸のしがらみ護岸（東区、西から）

年輪年代学的手法にもとづき接合した平城京出土斎串群

奈良文化財研究所の本庁舎建替にともなう発掘調査（平城第530次）において、平城京右京一条二坊から多数の斎串（いぐし）が、割材や小型甕をともなって一括して出土しました。斎串とは、端部を尖らせた板状の木製品で、主に祭祀に用いられたと考えられています。

今回出土した斎串は、同じ形式に分類されるものが多く、それらの木目が非常によく似ていたことから「同じ材から作られたかどうか」を調べるために、斎串や一緒に出土した割材を年輪年代学の分析対象にしました。それぞれの木製品の年輪幅を数値化し、年輪曲線のグラフにして、そのグラフが一致すれば同じ材であると推定できます。

分析した斎串と割材は、それぞれ同じ材から作られたと推定できる4つのグループ（a～d）に分かれました。この同一材のまとまりと、分析対象に含まれる年輪の範囲を手がかりとして斎串や割材を見直すと、写真のように接合しました。細長い板材を作り、それを横に折って斎串を作り出した様子をうかがい知ることができます。

このような接合状況や斎串が割材をともなって出土したこと、そしてそれらが同じ材と推定できることから、斎串の製作過程を復元することができました。

（都城発掘調査部　浦 蓉子／埋蔵文化財センター　星野 安治）

aグループの年輪曲線グラフ
（aグループのすべての年輪曲線を重ねたもの）

出土状況図

平城京右京一条二坊四坪出土　斎串の接合関係（実寸大）

中央研究院歴史語言研究所との協約締結

2016年2月17日、松村恵司所長が台湾・台北市内の中央研究院歴史語言研究所（以下史語所と略称）を訪問し、史語所の黄進興所長とともに「国立文化財機構奈良文化財研究所と中央研究院歴史語言研究所の研究協力に関する協約書」に調印し、研究協約を締結しました。

奈文研と史語所は、どちらも文化財研究の中心的拠点として、出土文字資料の研究や保管・公開において重要な役割を果たしている機関です。

奈文研は日本における木簡の調査・研究の中心拠点であり、先端的な研究の展開や調査手法の開発のみならず、資料集やデータベースによる資料公開もおこなっています。史語所は1928年創設の分厚い研究の伝統を誇り、報告書の刊行や漢籍文献データベース等の多様なデータベースの公開、簡牘（かんどく）の意欲的な展示等、資料公開にも精力的に取り組んできています。

本協約では、こうした両研究所がもつ様々な研究の蓄積やノウハウを交換することで、木簡・簡牘の研究資源化および研究の促進・深化を目指します。

また、短期的な成果を狙うのではなく、無理をしない、細く長い研究協力の継続を目指している点は、本協約の特徴といえます。これは、両研究所の知的資源の深みと豊かさを考えた結果、導き出された方向性です。

現在、木簡・簡牘資料の画像取得方法についての技術交流を進めており、近々史語所から刊行される『居延漢簡（参）』にはその成果が盛り込まれる予定と聞いています。今後さらに多様な交流が進み、豊かな成果が上がることが期待されます。

（都城発掘調査部　馬場 基）

笑顔で協約書に調印する両所長

出雲市内神社調査

建造物研究室では2016年度に出雲市からの受託で、すでに調査の終了している出雲大社を除く市内の神社に残る社殿の悉皆（しっかい）的な調査をおこなっています。これまで約190件の神社の現地調査をおこないました。今回の悉皆調査で、外観からの調査により古いもので17世紀後期、それ以降近代までの社殿が確認されました。

出雲大社の膝元で、大社造から派生したと考えられる切妻造妻入の本殿が多くみられましたが、大社の本殿等に代表される2間四方、田の字平面の本体前面に偏って階隠（はしかくし）（階段の屋根）の付く純粋な大社造は、ほとんどみられませんでした。屋根が斜めにかかる階隠の多くは本体の正面中央に取り付き、正面扉口は中央にあって内部は1室と考えられます。また、大社にはない組物を用いる社殿も意外に多く、18世紀前期とみられる遺構にも導入されています。大社の寛文年間造営の摂社・末社の中には、田の字平面でない中央に扉口をもつものがあり、大社本殿の寛文年間の計画図には組物を用いた本殿が描かれていることから、大社造からの派生変化は17世紀後期以前に色々なパターンが登場していたことがうかがわれます。

大社造以外では流造（ながれづくり）も相当数あり、前方縁は庇柱まで張ってその前方に階段を置き、現況では庇側面を柱間装置で仕切っているので、前室付流造に近い形態となります。縁を四方にめぐらせ、前方縁を広く取るのは大社造の派生形式に影響を受けた、他地方にはない特徴と考えられます。

今後は各類型にかかる代表的と考えられる遺構の詳細調査をおこなう予定です。

（文化遺産部　林 良彦）

大宮神社本殿

坪井清足元所長とのお別れ

祭壇に飾られた坪井清足元所長の遺影

奈良文化財研究所の第11代所長の坪井清足先生が、本年5月7日、享年94歳にて逝去されました。

去る6月25日、先生のご功績とお人柄を偲び、「坪井清足先生お別れの会」を奈文研と、公益財団法人大阪府文化財センター、公益財団法人元興寺文化財研究所が共同して、大阪府吹田市の千里会館で開催しました。当日は坪井先生と縁のある文化財関係者約400名が出席し、先生との思い出を語り合い、永久の別れを惜しみました。

坪井先生が奈良国立文化財研究所に入所されたのは、研究所創設間もない1955年のこと。平城宮跡の発掘調査を担当する最初の考古学研究者として採用されました。同年に平城宮跡の第1次発掘調査に着手しますが、翌56年には、大和平野農業用水導水路建設計画にともなう調査のため飛鳥地域に転戦。そこで飛鳥寺、川原寺、飛鳥板蓋宮伝承地等、考古学史に残る飛鳥の主要遺跡の発掘調査に携わりました。

1959年に再開した平城宮跡の調査では、3m四方の小地区を基本に、アルファベットと数字の組み合わせで調査地点を表示する方法を考案する等、大規模遺跡の調査方法と記録方法を確立しました。5BAS（飛鳥寺）といった遺跡の表記法や遺構の通し番号、瓦の型式番号等は、まさしく現代の情報化社会の到来を予見した措置であったといえます。さらに、発掘現場へのベルトコンベアーの導入、写真測量の遺構実測への応用、出土木簡や木製品の保存処理方法の開発、年輪年代法の導入と実用化等、先生は積極的に科学的な新手法の導入を推進されました。それらが現在、文化財保存の現場に広く普及していることを思うと、先生の卓越した先見性に頭が下がる思いです。

1965年に出向した文化財保護委員会事務局（現文化庁）記念物課では、高度経済成長期の開発優先の世相の中で、工事で壊される遺跡の事前発掘調査のルールづくりに取り組まれ、同時に地方自治体の体制整備に尽力されました。1965年には発掘調査のできる都道府県の専門職員は8名にすぎませんでしたが、全国に専門職員の配置を働きかけ、ようやく1968年に35名に増えたといいます。現在の専門職員数は5724名（2015年度）であり、埋蔵文化財保護体制の充実に専念された先生の熱意が、今日、世界で最も精緻な保護体制の構築に結びついたといえるでしょう。

1966年に先生が主導してまとめられた野外考古学のバイブル『発掘調査の手びき』は、最新の調査方法を全国へ普及させ、日本考古学の発掘調査や記録方法の高次化を意図するものでした。同年には奈文研で地方公共団体の専門職員の研修事業を開始し、それが1974年の奈文研の「埋蔵文化財センター」の設置へとつながりました。

さらに先生は遺跡の整備と活用にも心を砕かれ、平城宮跡で様々な試みを実践されましたが、現在、そこで生まれた整備手法が全国に広がっています。また、市民に支持される考古学を目指して、発掘成果や研究成果のわかりやすい広報活動にも努められ、ビジュアルで印象に残る歴史展示を推進される等、先生の先駆的な業績は枚挙に暇がありません。

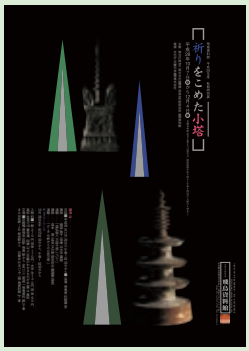
1986年に奈文研所長を退任されてからは、大阪府文化財センターの理事長、元興寺文化財研究所の所長を歴任され、最後まで文化財保護の最前線で活躍されました。

このように先生は、傑出した卓識と強力なリーダーシップによって、わが国の考古学の発展と文化財保護体制の充実に多大な貢献を果たされました。奈文研の育ての親である先生に改めて感謝申し上げるとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（所長　松村 恵司）

お別れの会の様子

飛鳥資料館　秋期特別展「祈りをこめた小塔」



今回の特別展では、日本や中国でつくられた小塔を展示します。

日本の小塔として知られるのが百万塔です。百万塔は、奈良時代に称徳天皇が造立を発願しました。現在は法隆寺に伝存するほか、平城宮跡からは未成品も出土しています。

中国では五代十国時代、銭弘俶八万四千塔とよばれる小塔がつくられました。呉越国最後の王である銭弘俶が955年頃から約10年をかけて造営したといわれ、日本にも12点が伝わっています。

これらの小塔は、内部に陀羅尼という経典を納めたことから法舎利塔と呼ばれます。国を安らかに治め、亡き人を弔うために、為政者たちは多くの小塔を造立したのです。

また、庶民信仰にも小塔供養をみることができます。追善供養や、自らの滅罪、延命、長寿等の祈りをこめた泥塔がつくられました。

時代と場所を越えて、小塔にこめられた祈りに思いをはせていただければ幸いです。

（副所長　杉山 洋／飛鳥資料館　西田 紀子）

会　　期：10月７日（金）～12月４日（日）月曜休館（祝日の場合は翌平日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
講 演 会：11月26日（土）13：30～、於：飛鳥資料館講堂　服部 敦子（帝塚山大学講師）「銭弘俶八万四千塔について」
　　森本 晋（奈良文化財研究所企画調整部長）「データ分析からみた百万塔」
ギャラリートーク：10月28日（金）　10：30～、13：30～
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎0744-54-3561（飛鳥資料館）

平城宮跡資料館　秋期特別展「地下の正倉院展　式部省木簡の世界―役人の勤務評価と昇進―」

2016年度の「地下の正倉院展」では、これまでにまとまった展示をおこなったことのない、奈良時代の勤務評価に関わる削屑を中心とする式部省木簡をご覧いただく展示を企画しました。

式部省とは、役人の管理・養成を担当する役所です。1966年におこなわれた発掘調査では、平城宮跡で最初に木簡がみつかってから初めて10,000点を超える木簡が出土しました。今回ご覧に入れるのは、式部省内でおこなわれた役人の勤務評価に使用された、側面に孔（あな）をもつ特異な型式の木簡とその削屑で、内容・型式ともに強い個性をもつ木簡群からは、式部省の日常業務や役人の昇進の実態をうかがうことができます。

本年は、式部省木簡が発見されてから50年です。日本の木簡研究史上かけがえのない発見を、最新の研究成果にもとづいてご紹介します。

（都城発掘調査部　渡辺 晃宏・藤間 温子／企画調整部　三輪 仁美）

会　　期：10月15日（土）～11月27日（日）月曜休館（10月31日は開館）
　　（Ⅰ期）10月15日（土）～10月31日（月）、（Ⅱ期）11月１日（火）～11月13日（日）、（Ⅲ期）11月15日（火）～11月27日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）
ギャラリートーク：（Ⅰ期）10月21日（金）、（Ⅱ期）11月４日（金）、（Ⅲ期）11月18日（金）、各日14：30～
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

■　お知らせ

飛鳥資料館　秋期特別展
10月７日（金）～12月４日（日）
「祈りをこめた小塔」

平城宮跡資料館　秋期特別展
10月15日（土）～11月27日（日）
「地下の正倉院展　式部省木簡の世界―役人の勤務評価と昇進―」

■　記　録

文化財担当者研修（専門研修）
○人骨・動物骨調査課程
2016年７月25日～７月29日　７名
○地質考古調査課程
2016年８月29日～９月２日　17名
○遺跡情報記録調査課程
2016年９月６日～９月９日　５名
○文化的景観調査計画課程
2016年９月12日～９月16日　10名

飛鳥資料館　春期特別展
「文化財を撮る―写真が遺す歴史」
４月26日（火）～７月３日（日）　9,974名

平城宮跡資料館　夏のこども展示
７月23日（土）～８月31日（水）
「ナント！おいしい！？平城京！！―奈良の都の食事情―」　9,532名

飛鳥資料館　夏期企画展
第７回写真コンテスト作品展「飛鳥の石」
７月26日（火）～９月４日（日）　3,383名

東院庭園観月会
2016年９月17日（土）　146名

■　最近の本

○『発掘遺構から読み解く古代建築』
（株）クバプロ　2016年４月
○『飛鳥むかしむかし』
朝日新聞出版　2016年８月

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　https://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2016年9月